



秋丸

十 和・大正方面から国道381号を東進。大正・北の川を過ぎ、旧大正町と旧窪川町の境にある弘瀬トンネルを抜けたところからが秋丸である。四万十川に沿って南川口の手前まで続く細長い地区で、古くは、井細川六ヶ村の一つであった。また、江戸後期の記録には、秋丸村・家地川村・野地村・川口村・天ノ川を「秋丸五カ村」として庄屋が置かれていたとある。現在の秋丸地区には61世帯、132人が暮らしている。

松葉川には上秋丸地区がある。この上秋丸地区も明治時代までは秋丸村といった。後に日野地村と合併して松葉川村秋丸となり、さらに昭和30年の町村合併による新生窪川町のスタートにあたり、松葉川村秋丸は上秋丸となった。

さて、ここ秋丸である。戦国期の記述には「アキマル古名にあらず、アキマロと称ふべし」とある。このアキマロの名の由来として「幡多方面との間に開いた道」開間路（あきまろ）ではないかという説があるというが、これについては定かではない。

多くの地区がそうであるように、秋丸もまた農業用水には苦労した地区で、藩政時代から、ため池を作るなどして、少しずつ水田を広げていった。人々は、稲作だけでなく、和紙の原料である「雁皮」や「楮」の採取・栽培にも取り組んだ。実際、江戸期には「御用雁皮」として年貢の代わりとして割り付けられたほどである。この

雁皮は、明治初期に発行された紙幣にも使用された。

地区の産土神は秋丸神社である。現在は高台にある秋丸神社は、もとは四万十川の川岸近くにあった河内明神である。江戸時代の水害で社ごと流出してしまったことにより、村人たちが現在の場所に移築して秋丸神社と改名した。

ところで、秋丸には「増太郎伝説」という言い伝えがある。ある日のこと、村の街道を行ったり来たりする見知らぬ少年を何人もの村人たちが見た。数日間それは続いたが、ある時を境にパッタリとその姿を消した。何十年かして村で不思議なことが立て続けに起こり、村人たちが困っていたところ、突然その少年が現れて「自分は昔この村で遊んでいた子どもだ。自分を祀ってくれると不思議なことはおさまる」と言ったという。

また、地区には「月の駄場」というところがある。なぜ「月の・」かと言いつと、その昔、ここに隕石が落ちたらしい。



国道沿いに「増太郎由来」という碑がひっそりとある

町のうごき

(7月31日)	人口	前月比	出生	死亡	転入	転出	
男	8,051	−19	男	1	15	10	15
女	8,908	−18	女	5	15	16	24
計	16,959	−37	計	6	30	26	39
世帯数	8,469	−6	(7月中の届出)				
窪川地域	11,994人	大正地域	2,387人	十和地域	2,578人		

四万十川の
水質状況

適正值(mg/l)		8月13日
リン酸	≤ 1.0	測定範囲以下
硝 酸	≤ 0.5	0.227
アンモニウム	≤ 5.0	測定範囲以下
アニオン活性剤	≤ 1.0	0.8
化学的酸素要求量	≤ 10.0	1.998
調査：大正（吾川）		
資料：四万十高校自然環境部		